

大阪 海外不安と販路縮小で下振れ懸念拭えず

(大阪) 大阪地区の鉄スクラップ市況は弱含み。電炉筋によっては在庫高を背景に、上下級に区別なく、制限買いを行うなか、東京製鉄や輸出商談ともに下落圧力が高い状況に変わりにないため、先安気配で過替わりへ向かっている。3日時点での同地区電炉のH2実勢値は2万2500~2万3500円(一部上値2万4000円)、新断バラ同2万5500円中心(同2万6000円)、鋼ダライ粉バラ同1万9500~2万500円見当で推移。

先月は電炉側の海上手当てにヤード筋による通常の入荷分に滞貨玉の出荷が加わったことが、需給バランスを崩しつつも、今月は1月に比べて海上比率を落とす動きにあることや、ヤード筋の在庫レベルも先月に比べれば低下しているため、「弱含みに変わりにないが、足元の価格レベルや需給面からしても、それほど大きく崩れることはないのでは」(ヤード業者筋)との声が聞かれる。

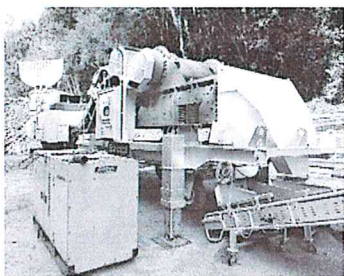
ただ、中国発の新型コロナウイルスが世界へ拡大しており、

れが世界同時株安や同国向け鉄鉱石価格の下落へと繋がっている。今週からアジア向け輸出商談も徐々に再開すると見られるが、こうした世界情勢や日本国内の東京製鉄主導による下げ足の早さから無理に調達を急ぐ雰囲気はなく、「どこまで下がるか分かりづらい展開にあるだけに、アジアミルも当用買いを済ませながら、値下げを誘導していくはず」(商社)との懸念を強めたままだ。また、地区内でも在庫レベルが高い状況に変わりになく、月初からの入荷次第では再び制限を強化する可能性は残ったままにあり、これまで地区電炉筋が手当てしてきた海上も他地区へ向かえば、西日本全体の余剰感を一段と助長させかねないため、「今回の下落は中国に対する不安やトルコの統落など、外的要素が大きく占めているだけに、海外が落ち着きを取り戻さない限り、このまま下げスピードは衰えることなく、2月前半もすすんでいくのでは」(同)との見方を強めている。

ワコー産業(和歌山) 移動式ユニット「K-CUBE」(近畿工業製)が本格稼働 選別ライン加わり木材リサイクルを強化

(和歌山) 各種廃棄物のリサイクルを手掛けるワコーグループのワコー産業(和歌山県日高郡印南町美里52、山本雅弘社長)は振動ふるいやベルトコンベアを一体化した近畿工業製リサイクル設備「K-CUBE(ケイ・キューブ)」を導入し、昨年12月から本格稼働を開始している。

ワコー産業はグループ会社の母体企業であり、舗装工事や土木工事などを主力とする和興建設が各種工事において、発生するガレキ類や汚泥、木屑など廃棄物の中間処理事業を手掛けている。その中で、木材は既設の移動式破砕機で加工した後、製紙メーカーへ向けていたが、供給過剰により、受け入れ制限が継続してきたことで、選別によって付加価値を高めようと試み、破砕後の後工程となる選別設備に「K-CUBE」を導入。近畿工業が開発した「K-CUBE」はふるい機や破砕機にベルトコンベアなどを備えたユニットシステム。20フィート及び40フィートのコンテナサイズに収納可能なコンパクト設計のため、容易に運搬でき、現場で金属など廃棄物のリサイ

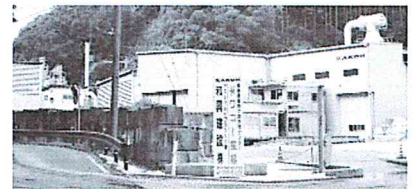


振動ふるいやベルトコンベアを一体化した近畿工業製K-CUBE。移動可能な特性を活かし、ワコー産業では(写真奥)移動式破砕機と組み合わせで広範囲での木屑処理を行っている

クル処理が行える。今回、ワコー産業側からの要望を受け、水平に保つシステムや本体に車輪を設けるといった特別仕様機を製作しており、こうしたユーザーニーズにしっかり応えられるのも近畿工業の

強みといえる。

同機の稼働後はバイオマス発電所に加え、グループ会社が運営する桑畑や一般向けのパーク堆肥として



時代のニーズに沿った多種多様なリサイクル事業を手掛けるワコー産業

販路拡大を図れている。移動式破砕機と移動式ふるい機の「K-CUBE」を組み合わせることで、工場内のあらゆる場所で一連のリサイクルを完結できるため、「破碎、選別の作業効率が高まると同時に、向け先に対する不安も解消された。今後は外部からの受け入れも図っていき、木材扱い量については月間1,000トンを目指して取り組んでいく」(山本社長)と意気込む。

昭和63年創業のワコー産業のリサイクル部門は多岐にわたるが、船舶や橋梁の錆取り時に発生する塗装かす含むサンドブラスト廃砂の中間処理業の認可を国内で初めて取得。サンドブラスト廃砂は塗装かすなどが混入するため、リサイクルは困難とされ、埋め立て処分が一般的だが、近畿工業が設計したキルン炉、ふるい機、風力選別といった各種ラインを組み合わせることにより、選別に成功し、処理後の廃砂は再生砂、塗装かすについてもフォーミング材として活用されている。こうした近畿工業のトータルリサイクルプラントの提案がきっかけでワコー産業との信頼関係がより強化なものとなり、現在、両社でこの新たな技術について特許を申請している。